異世界での日々

異世界に逝きたい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界での日々

【Ｎコード】
Ｎ１１３４ＢＡ

【作者名】
異世界に逝きたい

【あらすじ】
これはただの作者の暇つぶしのファンタジー、読んでくれたら嬉しい。ただそれだけの展開が遅いストーリー

プロローグ?

『お兄ちゃん、僕のこと忘れないでね』

突然妹は変なことをいってきた。

散らばったトランプを片付けている手が止まる。

『はっ!!、どうした突然?』

『何でもないよ。そうだ、トイレ行ってきてくるよ』

慌てて出て行く妹の後ろ姿が、もう二度と会うことができないとは、この時に気づくはずもなく、しばらく戻ってこない妹を探しにいった。

すると、夕食前の料理をしているお母さんに、

『お母さん、明梨見なかった。』

『明梨って誰のこと?、お人形?私今忙しいからあとでね。』

『何言っているんだよ、明梨だよ、妹だよ、うわぁぁぁ〜』

僕は次の日精神科に連れていかれた。

これが僕の１０歳の記憶

プロローグ？ーそして始まり

あれから８年

俺は普通の少年になりました。
普通に寝て起きて、顔洗って、ご飯を一人で食べて、歯磨いて、学校行って勉強して、休み時間には本読んで、昼に一人でパン食べて本読んで、また勉強して、一人で近くの本屋によってから帰って、テレビ見て、風呂はいって寝るの普通な暮らし。
それが俺のつまらない生き方。

でも今日は違った。
いつもどうり、一人で本屋によってから帰ろうとした時に、黒猫に声をかけられた。

『にゃー、君君その腕時計を見せてほしいのにゃー』

突然のことに思わず鞄を落としてしまう。
気がつけば人の姿がなくなった。今は商店街にいるのにお客も店員一人誰もいない。

『えっ、』

ものすごい速さでＢダッシュをして逃げ出した。

つもりだった。さっきから同じところを走っている。

『無駄だにゃ、それより見せてくれるだけでいいんだにゃ。』

無駄に走るのも疲れる。だから見せることにし、腕時計を外し渡す。
猫は立ち上がり受け取った瞬間

『なるほどにゃー♪』

猫は尻尾を振り振りしながらすぐに腕時計を返してくれた。

『今から君に話したいことがあるんだにゃー♪君君異世界興味ないかにゃー』

正直、今の状況にビックリと同時に、妹がいるかもしれない。興味がある。

『あるみたいだにゃー♪』

『そこに明梨がいるかもしれない。行きたい』

『明梨ね、前に魔力暴発を起こす可能性がある者を何人か送り届けたことがあるから、多分いたと思うにゃ。』

『行く、いくよ、そこに連れてけ。』

『了解にゃ♪でもその前に話しを聞くにゃー、異世界に送ると地球

の関わった記憶と最低限の者が消えるにゃー。君には魔力があるみたいだから、レジストしたみたいなのにゃー。ここまではいいかにゃー？』

『あぁ、妹に会いたいから早くしろ』

『そう焦らないでも行かせてあげるにゃー♪まずは、今から行く世界は魔法があると同時に魔物とかいるにゃー。君には巨大な魔力がある代わりに放出できないみたいだにゃー。だから、今日は偶然見つけたのは奇跡なんだにゃー♪それより、送っても魔物にあってすぐ戦えず死ぬってことないように”記憶の本”の切れ端を与えるんだにゃ。つまり君には、あまり使われないこの”強化魔法の書“のどれかの切れ端をあげるんだにゃー。』

いつの間にか猫の前に無数の本が浮いてありさらに数本の本が消え8冊の本だけが残る。
これが魔法だろう。

『この紙に手を当ててほしいにゃー、いつもなら水晶にも触ってもらうのにゃが、さっき身が壊れてないのが不思議なくらいの魔力を感じられたから割られると経済的に厳しいからやらないにゃー』

猫は自分の毛を一本抜き、それは一瞬のうちに紙になって渡してきた。
言われた通りに触ってみたが変化がない。

『にゃにゃ無属性ですかにゃー♪珍しいのにゃー、初めてなのにゃー♪ならこの本なのにゃー。これを受け取った瞬間君は後戻りで・・・』

やっぱり、浮いていた本が一瞬のうちに消えて一冊の本だけが残る。
猫はそれを千切り俺の前に見せてしゃべっている途中に瞬間それを取った。そして紙は光になって俺の体にはいってくる。

頭が急に痛くなり、俺は気絶した。

『・・・そう、分かったにゃー♪一名様ご案内～だにゃー♪』

これから俺の新しい人生が始まった。

1日目ー目覚めたら

目を覚ますとそこは知らない木製の部屋の中のベッドに寝ていた。起き上がろうとすると、何かの皮でできたブカブカの服を着ている。誰かが着せてくれたのだろう。

部屋を観察してみると、テーブルに置いてあるコップと花瓶、ロウソクだて以外は木でできている。扉から一番奥の端に今寝ていたベッドがあり、その隣に机と丸椅子があり、机には土を練ってできたシンプルな水の入ったコップと花瓶とロウソクだてがあり、花瓶には見たことがない黄色い花がつんである。あとは、ベッドの足の方に大きさが違う同じ作りのタンスが二つ並んで設置されているだけの必要な物しかなさそうな部屋だ。

そして立ち上がり水を飲んでから部屋から出る。そこには、キッチンで調理をしている女性の服を着た筋肉質な黒人のおっさんがいた。

『あら?、もう起きたの?』

変なおっさんが料理をしているのを止め、声をかけてきた。この人は多分命の恩人だろう。

『あっ、はい。え～と助けていただいてありがとうございます。』

『思ったほど元気そうじゃない。こういうのって2～3日目覚まさないと聞くけど1日で目覚ましちゃうのね。』

『君、私の管理する草原に裸で倒れていたそうなの。その服は私の忘れたい過去のおさがりなのよ？。ちなみに発見者は今はギルドの依頼の途中だったみたいだからすぐにどこか行ったわよ』

・・・どうやら俺は恥ずかしい格好で倒れていたみたいだ。あとその格好で可愛い声は止めてほしい

『すいません。服やベッドを貸していただいて・・・』

『いいのよ？、それにもうその服着れないからあげるわ。それより、あなたのお名前は？』

『・・・・・・っ！！』

自分の名前が出てこなかった。覚えているのは、知らない女の子の顔と魔法の使い方だけ、それ以外は思い出せなかった。

『・・・・・・そう、なら私の家で一緒にしばらく暮らさない？いい考えだと思わない？』

突然名前も知らない変なおっさんにこんなことを言われた。でも俺は何故か知らない女の子を今すぐに探しにいきたい気分だった。なので、

『すいません、え～と、「アルシュテーラよ、アルさんと呼んで、」アルさん、俺にはそれはできません。今すぐにでも今覚えている女の子を探しにいきたいんです。』

『そう、分かったわ。無理に止めることはできないもの。でも今は体を休めた方が良さそうよ。ここらへんは低級の魔物しかいないけ

ど、魔力もないアナタにもしもがあったら嫌だから、その子を探しに行くのはもう少し待ってね。今は寝てなさい。』

突然眠くなってきて、体に力が入らなくなってきた。そして俺は倒れた。

3日目?ー出会い?

気がつけばまた同じ部屋で寝ていた。

部屋の変わっている所は花瓶の花が紫色の花になっていることとベッドの隣に布団が敷いてある。

アルさんは、ここで寝ていたのだろう。お腹が減った。

部屋から出ると、アルさんはいないみたいだ。

テーブルの上にパンと食器、メモが置いてある。

メモには

鍋にスープがあるからご自由に、あと地図にある道具屋で働いているからこれたら来てね?

裏には手書きの地図がかかれており、少し分かりにくいが多分いけるだろう。

それよりお腹が減ったのでスープを取りに行ったら赤い石がついているコンクリートでできているのに鍋が置いてある。

赤い石が多分、コンロのスイッチだろう。だからいじるわけにはいかないと思い、スープをいただく。

スープは黒豆が浮いていて芋が沈んでいる、赤いぬるいスープだ。

『いただきます』

硬いパンをスープにつけながら食べると食べやすく、スープはトマトの風味のさっぱりしておいしい。
たぶん食材は地球とにているか、全く同じかもしれない。

『ごちそうさん』

パンとスープを食べ終わり、道具屋に行くことにする。

外に出ると此処は村みたく同じ作りの家が建っている。空を見るとまだ空が明るいのに、太陽の隣に月がみえる。
さらに村を囲うように仕切りがあり、所々に黄色い光輝いている何かがついてある。
あれは、結界みたいな物だろう。

『坊主起きたのか、お寝坊さんよ』

村の入口の門番であろう鎧を装備し、２つの斧を腰につけたオッサンに声をかけられた。

『あっ、はい、すいませんが、この道具屋に行きたいのですが、』

『それなら、娘に案内させっから待ってな。』

そう言いながら、近くの家に入っていく。

しばらくして出てきたのはオッサンと、そばかすがある長い茶色の長い髪ある自分の肩までの背の小さい少女が出てきた。

『初めましてダス～、ワタス、“ピノコ“と言いダス。よろしくダス～』

何だろう、この世界の住人は普通な人はいないのだろうか。

『あの～、そんな見つめないでほしんだな～、照れるダス～』

（いや、見てないから）

と心で思いながら、

『すいません、ピノコさん。道案内をお願いしたいのですが・・・』

『ガハハハハ、堅苦しいな。坊主名前は何ていうんだ。』

『・・・すいません、名前が思え出せないので・・・・・・』

『なら“ナナシ“だな坊主。俺様の名前はギルスタ・レイチル。“ギルスタ“だ、よろしく』

少しムカついたが、その後、村についての説明をピノコに紹介されながら、アルさんが働いている道具屋についた。

他の村人にも声をかけられたが、村人ＡＢＣなので忘れた。

3日目?ー道具屋

『此処が目的地なんだな～、ワタスようがあるダスから、一緒なんダス～』

後ろで何か言っているピノコを無視して入口に入るとオカマ・・・アルさんがリンゴをコロコロ転がしながら、店番をしていた。

『いらっしゃい、そろそろ目覚める頃だと思ったわ。それっ』

そう言いながら、リンゴを投げてきた。

『ありがとうございます。すいませんが・・・・・・』

『アナタは、もう旅に出ようとしているの?あと、ギルスタさんにあだ名つけられなかった?』

『父さんは、いつも町の人以外に来た人に必ずあだ名つけるダス～、有名なんダス～、人気があるダス～、モウ行くダスか?』

（もじもし）

たぶん、馴れ馴れしくて有名何だろう。

あと、ピノコや何故さっきから後ろで変なダンスしている。キモいぞ

『今すぐに行きたいのですが・・・・・・、アルさんにお礼をしていないので、』

『あら、律儀なこと?ならアナタ戦うことはできる?始まりの草原ならギングスライムの縄張りに入らなければアナタでもお城までい

けると思うの？？コレ届いてきてほしいのよ。』

そう言いながら、懐から封筒を取り出す。

それは丸の中に大きさの違う水滴が落ちていくデザインの判子がおしてある封筒だった。

『あの～、ワタスも行っていいだすか？』

（もじもじ）

『元からそのつもりよ？、ギルスタには、もう言っているのよ。そうそう、アナタにプレゼントよ、その服とアナタが寝ていた一番大きいタンスに、一番下に剣があるからそれ持っていていいわよ？あと、これもあ☆げ☆る？』

そう言って棚から少し穴のあいた鞄を投げてきた。

中には、緑の液体の入ったビンと、食料が入ってある。

どうやら強制的にピノコのお供のお使いが始まるみたいだ。

何か後ろでピノコが（アワアワ）

また変なダンスしている。

しかし、アルさんとピノコの二人がキモいことについて皆さんどう思う。

無視ですか・・・

『わかりました。』

『でも、今から行っても夜になるから明日の朝に行ってね？

それじゃ、ピノコちゃんにようがあるから、男は出て行ってくれない？』

アルさんも男だと思いながら俺はお店を出て行った。

それから、しばらくリンゴを食べながら村を散歩してから、アルさんのお家に帰った。

4日目?ー出発

朝、起こされた俺は少し機嫌が悪い。
でも、アルさんが作ってくれた、昨日と同じパンとスープに、目玉焼きとフルーツを食べ、お腹が膨れると機嫌は少し良くなった。

さて、食べ終わったことだし、現在の装備を教えよう。

右手：ロングソード
左手：なし
頭　：なし
体（上）：布の服
腕　：なし
体（下）：布のズボン
足　：皮の靴
アクセサリー：なし

普通の初期装備だ。
此処から冒険は始まった。
協会に記録を残しに行かないといけないのだろうか？
たぶん、そんな機能はないだろう。

そんなことを考えながら、玄関から出て8歩の待ち合わせの場所へ向かった。

ギルスタさんとピノコはもう準備が出来て行くだけみたいだ。
あとは、忘れ物を取りに道具屋に行った、アルさんを待つだけだ。
ちなみに、ギルスタさんは昨日と同じ格好で、ピノコは・・・

背中：巨大な木製のブーメラン
腰　：鉄のブーメラン×２
頭　：リボン
体（上）：はでな服
腕　：皮のグローブ
体（下）：赤いスカート
足　：皮の靴
アクセサリー：なし

あのブーメラン重くないのだろうか。ピノコの背より大きいよ～。
あれは投げるために　あるのだろうから、ピノコって力持ちなんだな～、少し感心した。

（ちょんちょん）
誰かに肩をつつかれた。後ろを振り返るとギルスタさんだった。

「娘は可愛いだろう」

どうやらギルスタさんは親バカの分類みたいだ。

「そうですね、可愛いです」

心にもない事を言う。
するとギルスタさんは気分をよくしたみたいで、
『そうだろう、そうだろう。ピノコは今日は、いつもより早く起きて準備をしていたんだよ、娘はやらんからな。』
昨日と話し方が違うような気がするギルスタさん。ハッキリうざい。
ピノコの方を見ると、腰のブーメランを投げる構えをしている。
あれ？俺危なくない。
そう思っていたが、ピノコは振り下ろす手を止めずに投げてきた。
『・・・特に、あの・・・・・・・』
まだギルスタさんは、ピノコの話をしている。
俺は話を聞いているけど、いつもどうりに、右から左に受けとばしているけど、痛いのは嫌いだから、しゃがむように回避する。
よけた後、頬に血がついたように生ぬるい液体がついた。
『も～う、変なこと言わないで欲しいダス。』
後ろからピノコの声が聞こえた。
ギルスタさんの方を見ると、ブーメランをキャッチしているが、鎧をつけた腕から血がたれている。
『ガハハハハ、すまん、すまん。あまりにもピノコが可愛いから、

ナナシに自慢してたんだ』

『そんな可愛いダスか～、何回いわれてもてれるだ～』

この家族は、合った時から少し思っていたが、ダメな家族だと深々と感じていた。

『お待たせ～、コレを取りに行っていたのよ?』

どうやら、アルさんが戻ってきたみたいだ。

ちなみにコレとは、2枚の何かのウロコらしき物だった。

『これは、何ですか?』

『コレは竜人族の商人に見せると、一回限り安く買えるようになる竜のウロコなの?

私は、お店をやっているから欲しい物のは、秘密の方法である程度そろうから、コレもあげようと思って』

『いいんダスか～、ありがとうダス～、嬉しいんだな～』

（キラキラ）

今度は、ピノコの目が☆になったよ。

とりあえず、どんな物があるかわからないが、受け取れる物は受け取る主義なため、もらっておく。

『ありがとうございます。』

『んじゃ、アルも来たことだ。ピノコ頑張るんだぞ。』

『そうね、行ってらっしゃい?』

『行ってくるダス』

『・・・・・・』

こうして、俺の冒険は此処から始まった。

4日目?ー冒険

村から出て、始まりの草原に行って思ったことは、草原の大地を踏みしめる土の柔らかさ、流れる風の心地よさ、そしてまだ見ぬ場所のワクワク感、あとは少しだけいつ襲われるかわからない緊張感とドキドキ感のスリルも気持ちいい。

最後の気持ちは、俺は今まで気がつかなかったが、Mだったのだろうか。

ちなみに、ピノコはたまに腰のブーメランをたまに投げている。

『今日も天気がいいダス。雨ガエルが活発化しているダスから、明日は雨ダス。』

俺は一度も鳥以外の生き物を見てないのだが?

『へ〜、草原に出て、まだ鳥しか見てないんだけど・・・・・・カエルいたっけ?』

『さっきまでいたダスが、ナナシさんにケガさせるワケにはいかないダスから、倒しているんだな〜』

驚きの真実である。たまにブーメランを投げた先を見ていたが、ブーメランは黒い点になるまで飛んで行って戻ってくるから、気にはしなかったが・・・、アレで倒していたなんて驚きの真実である。

気分的に、気がつかない間に経験値を手に入れているのだろう.

こんな感じに?

俺は□□ポイント経験値を手に入れた。
俺はＬｖが上がった。
体力が□上がった。
素早さが□上がった。
幸運が□あかった。

こんな感じだろうか？
異世界にきたのだから、戦ってみたいし、まだ一回も使用してない強化魔法を使ってみたい。

いつの間にかナナシさんと呼ばれている。

『・・・ありがとう』

一応、感謝しておく。

『う～、テレるダス～、恥ずかしいダス～』
（もじもじ）

また変な踊りをしている。これは、嬉しい時にやるのだろう。
あっ、投げた。

踊りながら、ブーメランを投げて、キャッチしている。

「“アイ“」

初めて魔法を使って、ブーメランを投げた先を見てみた。
見えたのは、ブクブク太った鶏と葉っぱの傘を差した青いカエルが２匹倒れていた。
あの一回で倒したのだろうか？
だとしたら、ブーメランは歪な軌道で行ったに違いない。
しかし、ピノコよ。その変なダンスは俺の見える範囲ては止めてくれ、心から願う。
『あの～、その雨蛙が出ると明日は雨何ですか？』
『そうダス。雨ガエルの鳴き声は雨を呼ぶんだな～』
話を別な方に向けたおかげで、踊りは辞めてくれた。
ついでに草原のことも聞いてみよう。
『この草原には、どんなモンスターがでるのですか？』
『それはダス～、草原の主様と、その子分のスライム、肉が美味しいコッケイ、最後に雨ガエルの４匹ダスな。』
ピノコは手で４本指を突き立てながら教えてくれた。
『あのダスな～、ナナシさんの記憶はどんなことを覚えているのダスか？』
（もじもじ）
また奇妙なダンスをし始めながら、質問してきた。

俺は覚えている少女のこと、魔法のことを言った。

『えっ～、魔法使えるなんてすごいダス。なら、魔法学校にいたんじゃないダスか？』

魔法学校・・・・・・記憶にそんな所はないけど、もしかしたら・・・・・

記憶の少女の手がかりがあるかもしれない。

それ以外のことが考えられなくなり、気がついたらお城の門の前にいた。

村からお城まで近かったのかもしれない。

4日目？ーお城？

結局、草原に出て魔法で視力強化をしただけで、特に何もしなくピノコについてきた俺だけど・・・・・・初めての異世界。
恐いのは、嫌だけど戦ってみたかった。

ピノコを見てみる・・・

『・・・・・・（涙）』

泣いていた。
こんな時はどうすればいいのだろう。

『え～と、ごめん』

とりあえず謝っておく。
しばらく泣きやむまで、入ってすぐのベンチに座っていた。

『・・・・・・う～、ごめ　んダス。ワタす　があんなこと　言ったか　ら・・・・・・』

しばらくたち、落ち着いたみたいだ。
どうやら考え込んでいる間に何かあったのだろう。

『こっちこそゴメン。魔法学校に俺に関わる記憶の手がかりが、あるんじゃないかと考えていたから』

『分かってい　るダス。ただ私が　記憶のこと聞いたダスから、無

視されたと思ったダス。』

『ははは、ちょっと考えごとしてたら、俺だって門の前にいるんだもん。俺は今ビックリして、今度はピノコも泣いてるからどうすればいいかわからなかったよ。』

『女の子を無視するなんてひどいダス。男は女に優しくしてればいいんダスよ～』

・・・・・・可愛くなければ女と認めない。

此処は無視して歩くのが正解だろう。

『ま、待つダス。待ってくれダス～』

どうやら正解だったようだ。

ところ変わって現在。

ギルドの隣にある“食事処ガッツ”で俺達は飯を食べに立ち寄ったのだか、酒と汗のにおいで臭い。

ピノコはあまり感じてるわけでもなく、普通に俺より先に席に座り手招きをしている。

あ～、気持ち悪い。コイツといると疲れる。
席についてメニューを見たが、○○肉のステーキ定食か単品ステーキとドリンクしかメニューにない。
お金はピノコがだしてくれるし、安めのステーキにしよう。
『ワタすは決めマスた。ナナシさんは何がいいダスか？』
『悪いが、もう少し待ってくれ』
どれにしよう、今まで見たことのない肉の名前に決めらんない。
『ピノコ・・・お前にまかせる。』
『すいませ～ん、ゴミョンのステーキ定食のタレと塩でお願いしま～す』
・・・・・今、普通に言ったよ。ダスダス言ってない。
不思議な新鮮さを感じた。
『ハ～イ、シバラク待ッテロ。コノヤロウ』
声の聞こえてきた方を見る。
あっ、あっ、あれは・・・・・ロボットだと～。
シルバー装甲の白いラインがカッコイい、ヒーローみたいだ。
今まで記憶の中に機械でできている物は一度も見たことがなかった

が、最初がロボットだとは・・・

『あれは、なんだ？』

『あれダスか？、ワタすもよく知らないダスが、あれは遺跡から見つけた、魔王の遺産ダスね。いつ作られたか、構造が不明な物ダスが、元冒険者の料理長が見つけて、主様、主様と料理長が命令すれば、どんなことでも実行する物らしいダス。
一応危険としては、実験で破壊力が高い光の光線を腕と胸から出したり、三つの光線を出す巨大な筒状の何かに変形するらしいダスが、料理長の命令は絶対ダスから大丈夫ダス。
ただ、監視のためにギルドの横に店だしたらしいダスがね』

やっぱりカッコイいが、主様はないと思う。

『へ～～』

いつもよく長く返事をしてみる。何か気分が冷めてきた。

『ヘイオ待チ、ゴミョンノ、タレ・塩。速ク食イ終ワレ。』

話し方が少し遅く感じる。
あと置き方が雑でスープをこぼして行きやがった。

『ワタす、この塩いただくだ～』

そう言って、少しピンク色のステーキ定食を持って行く。

あと残るは、タレがたっぷりかかった方だ。
どちらも旨そうだ。

真ん中にバターがのってあるライス
コーンスープらしき黄色いスープ
コーンとジャガイモが付き添いの、グツグツと響くソースたっぷり
のステーキ

『いただきます』

『？』

ピノコがステーキをかじりながら、クビを傾けている。
だが、そんなの俺には関係がない。

俺はステーキ定食を堪能した。

あの時が来るまでは・・・・・・

4日目?ー食事処

『うまい』

力強くいえる。
バターのしみたご飯に一口大に切ったステーキを乗せかき込む。
少し酸味のあるソースが口に広がり、お肉の弾力を楽しむ。
スープは、カボチャのスープだったみたいで、カボチャの甘味と風味を楽しめる。
特に、たっぷりのコーンが嬉しい。フォークにナイフを使って乗せるのは大変だが、コーンがソースに勝っており、俺はステーキより好きかもしれない。

カチャカチャ音をたてて食べている俺だが、ピノコはご飯とスープはすでに無く、ステーキを初めて切って、フォークで口に運ぶ所だ。いっちょぐいをしている。

さて、ステーキを堪能している俺達だが、現在の状況を説明しよう。

俺から見て左側の奥の席で、ゴツい鎧を装備した巨大な斧を背中に背負ったオッサンと、髪の短い赤髪で、左だけ半袖の黒い服をきた長剣を装備した女性が大食いバトルをしているのだが、オッサンはガツガツと勢いよく食べているのだが、女性の食べている料理が赤く、さらに赤い瓶を使いながら食べてる。さっきオッサンの隣に座っていた人が、味見していたの見たが、悲鳴をあげて口を押さえながら倒れた。

あの女性は量といい、色といい味覚が壊れているんじゃないか心配だ。

オッサンはさっきから食べるスピードが遅くなり何かの飲み物で押し流しているように感じる。

でも女性は食べるスピードも、瓶の消費量がハンパなく、瓶も転がってゆく。いくつの瓶を持っているのだろう。

『メルチさんは、相変わらずダスな。』

いつの間にか食べ終わっているピノコ。
あの女性を知っているらしい。

『あの人誰だ？』

『あの鎧をきている男性は、城外武装守備隊の人ダス。あっちは、“メルチ“ってっていってギルドで、“炎神の左手“で有名なんダス。カッコイいダスよ～、燃える左腕を振り払う姿が』

『結構、知っているようだな。ギルドのごと、詳しいのか？』

『そうダス。ワタすあの“カルモ“の中で三番目に強い女性ダスから、ギルドでB級ハンターで、有名なんダス。
ちなみにアルさんが一番強くて、二番目は、魔法学校に行っているからいないダス。』

最後あたり、どや顔で言ってきやがった。うざい、ムカつく

『ごちそうさま』

『さっきの食べ始める時と、終わる瞬間に言っている言葉はなんダ

ス？』

・・・・・・あれ？なんで言っていたんだ？

自分でもどんな意味なのか、不思議に思っていると

『見つけたにゃー～！！』

お店全体に広がる声が響く

それと同時に周りの音がザワザワと声が強く感じる。その中には・・・・・・

『主様、主様、高魔力反応、高魔力反応、危険、危険、危ナイダロウ』

『あー、ほっとけ。敵意は感じねぇから』

とか、

『気付いたか？この魔力量注意しとけ』

とか

『なんダス、なんダス、アワワワ』

とか

『むっ！！』

頭が割れるように痛い。めまいがする。

俺は気を失った。最後に見えたのは、ピノコの慌てる顔と、どこかで見たことがある黒猫の姿だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1134ba/

異世界での日々

2012年1月6日08時51分発行